

シンポジウム「彰義隊の上野戦争—明治 150 年に考える」

市川総合研究所代表理事 大藏 八郎

〒 272-0836 市川市北国分 2-32-31

連絡先: 携帯 080-3534-0402、shogitai18@gmail.com(シンポジウム問合せアドレス)

1. シンポジウムの趣旨

今から150年前、1868年7月4日(旧暦/慶応4年5月15日)に彰義隊と新政府軍との上野戦争がありました。江戸期以降、日本の首都で内戦が行われた唯一の瞬間でした。「会津藩」が幕府への忠を貫き、「新選組」が佐幕の筋を通したとすれば、「彰義隊」は武士の義を彰(あきら)かにし、「高貴なる敗北(Nobility of Failure/I. Morris)」を遂げ、“江戸最期の日を花火のように彩り、長い徳川時代を一瞬のうちに回想してみせました。”(森まゆみ『彰義隊異聞』より)

ことし平成30年は「明治150年」の節目ですが、戊辰戦争の勝者に祝賀のスポットをあてるだけでなく、敗者たちへの顕彰と鎮魂も不可欠ではないでしょうか。恩讐を越えた明治の国家統一と近代化への歩みの先駆けとなった歴史事件として、幕末史のなかで殆ど忘れられた彰義隊と上野戦争に光を当て、真実を発掘して日本史に加筆しなければならない、と私たちは考えこのシンポジウムを企画しました。

シンポジウムでは彰義隊に関する当代一流の有識者がパネリストとして、それぞれの立場から彰義隊を多面的、複合的、本格的に論じ、彰義隊の知られざる真実の歴史的役割と今日的意義を皆さまに提示します。また彰義隊士だった関弥太郎(岡安喜平次)と同門のよしみで岡安喜代八師他が長唄「楠公」を演奏しシンポジウムに花を添えます。江戸時代最後の江戸人の人間行動としての上野戦争を検証すれば、通説を超えて日本史の核心の一つが見えてくることが期待されます。

(1) 幕末史の通説では、上野戦争は大村益次郎の“アームストロング砲で簡単に決着した”ことになっていますが、実際は、1868年1月から1年半続いた戊辰戦争の天王山の戦いでした。彰義隊敗北のこの日が事実上明治新政府誕生の日となりましたが、もし、上野戦争が1日で決着せず長引いていれば、江戸が火の海になり、その後の歴史も違ったものになった可能性があります。

(2) 彰義隊は幕末の混乱期に一旗揚げようと集まった“烏合の衆”と軽んじるのが通説ですが、彰義隊の中核は、1867年の大政奉還まで幕藩体制下の日本の中央政府を担った最上位の武士階級、つまり公儀直参の幕臣やその子弟らでした。

(3) 一般に彰義隊は幕臣(旗本・御家人)から成るとされますが、実際はこれに加え、会津藩(福島)、桑名藩(三重)、関宿藩(千葉)、結城藩(茨城)、高田藩(新潟)、高崎藩(群馬)、明石藩(兵庫)、小浜藩(福井)、庭瀬藩(岡山)、松山藩(愛媛)、唐津藩(佐賀)などの脱藩の士が参加する連合軍で、戦闘の形勢によってはこれに加勢しようとする動きが江戸の各地でありました。

2. 開催日時・場所

期 日：2018年12月1日（土曜）

時 間：午後2時～午後5時半（開場・受付は午後1時から）

会 場：東京大学大講堂（安田講堂）（東京都文京区 本郷7-3-1）

交 通：東京メトロ南北線「東大前」、丸ノ内線・都営大江戸線「本郷三丁目」下車

入場料：2,000円（全席自由・先着順・当日払、中学生以下無料）

定 員：1,100名

3. パネリスト（あいうえお順・敬称略）

各人が15分程度スピーチ、その後交互にパネル・ディスカッション、質疑応答



うの せい しょう しょう
浦井正明

昭和12年（1937）東京生まれ。1961年慶應義塾大学文学部史学科卒業。東叡山寛永寺長膺。天台宗僧侶。東叡山現龍院前住職。台東区教育委員会委員長、台東区文化財保護審議会委員等。

主な著書に、『もうひとつの徳川物語 将軍家霊廟の謎』
『「上野」時空遊行』『上野寛永寺将軍家の葬儀』

彰義隊は組織だった軍隊ではない。それを幕府の正規軍として明治末年まで叩き続けた明治政府の思惑とは何か。



きりのさくじん
桐野作人

昭和29年（1954）鹿児島県生まれ。歴史作家、武蔵野大学政治経済研究所客員研究員。専門は薩摩の歴史（戦国織豊期と幕末維新时期）と織豊時代。

主な著書に、『西郷隆盛という生き方』（共著）『村田新八』（共著）『龍馬暗殺』『さつま人国誌』幕末明治編1～3
『孤高の将軍 徳川慶喜』

薩摩藩が上野戦争に参加するいきさつ、黒門口の苦戦の実態、戦後、薩摩側で彰義隊戦死者の供養塔建設の動き。



こばやし たつお
小林 達夫

昭和 60 年（1985）京都府生まれ。映画監督。

2015 年、彰義隊士の青春を描いた時代劇『合葬』（原作：杉浦日向子）が第 39 回モントリオール世界映画祭ワールド・コンペティション部門に正式出品される。平成 27 年度京都市芸術新人賞を受賞。監督近作は 10 月 12 日から放送の NHK ドラマ『昭和元禄落語心中』。

映画『合葬』を制作する過程から、彰義隊士たちの上野戦争に至るまでに日々をどのように描こうとしたのか。撮影現場でキャストやスタッフとどのようにビジョンを共有したのか。完成後の公開、海外映画祭での反応をまじえて話します。



ほし りょういち
星 亮一

昭和 10 年（1935）仙台市生まれ。1959 年、東北大学文学部国史学科卒業。2002 年、日本大学大学院総合社会情報研究科修士課程修了。福島民報記者、福島中央テレビ報道制作局長等を経て歴史作家。戊辰戦争研究会を主宰。

主な著書に、『会津落城』、『最後の幕臣小栗上野介』、『偽りの明治維新』、『東北を置き去りにした明治維新』、『彰義隊—われら義に生きる』など。

東叡山寛永寺はかつて上野の山に何十もの伽藍をもつ大寺院だった。ここに慶喜の護衛と称して旧幕臣が集まった。彰義隊である。その兵力三千人、江戸城に進駐した大総督府を威圧した。佐賀藩のアームストロング砲の砲弾はおおく不忍池に落ち、本堂には命中しなかったが、これで彰義隊は敗退した。しかし、その心意気は榎本武揚の海軍に引き継がれ、多くの隊員が、箱館戦争に参戦した。講演では、彰義隊の心意気をお話しします。



もり まゆみ
森 まゆみ

昭和 29 年（1954）東京生まれ。大学卒業後、PR 会社、出版社を経て、1984 年、仲間と地域雑誌『谷中・根津・千駄木』を創刊し、聞き書き三昧の 30 年、記憶を記録に替えてきた。

主な著書に、地域を歩き話を聞く中から『鷗外の坂』『彰義隊遺聞』『「青鞥」の冒険』など。他に『暗い時代の人々』『お隣のイスラーム』『子規の音』『「五足の靴」をゆく』など。

現在、日本ナショナルトラスト理事。

彰義隊の上野戦争は、上野広小路辺での戦いだけでなく、広く、上野、谷中、根津、日暮里までも戦場であった。町に残された上野戦争の記憶、物、それは我が町の歴史でもある。それはまた徳川 270 年の歴史を首都である江戸で一瞬のうちに振り返って見せた、意義ある戦いであった



もりたけんじ
森田健司

昭和 49 年（1974）神戸市生まれ。大阪学院大学経済学部教授。博士（人間・環境学／京都大学）。専門は社会思想史。主な著書に、『明治維新という幻想』、『江戸の瓦版』、『外国人の見た幕末・明治の日本』、『石門心学と近代』など。

江戸の庶民に愛された彰義隊と、彼らに疎まれた新政府軍。慶応四年に江戸で一五〇種ほども発行された風刺絵には、旧幕府側の挽回を願う庶民の思いと、その理由が刻まれている。



やまもとえいいちろう
山本栄一郎

昭和 37 年（1962）山口県生まれ。神戸学院大学経済学部卒業。山口県地方史学会理事。大村益次郎没後百五十年事業実行委員会顧問。著書に、『真説・薩長同盟』『実伝・坂本龍馬』『吉田松陰の妹・文（美和）』『幕末維新の仕事師・大村益次郎』など。

大村益次郎の研究は昭和 19 年以降、止まっている。忘れられた軍神、謎多き大村の実像を上野戦争における大村の行動と作戦、戦略、思想から掘り下げる。



やまもとひろみ
山本博文

昭和 32 年（1957）岡山県生まれ。東京大学教授。昭和 55 年、東京大学文学部卒業。博士（文学）。専門は日本近世史。『江戸お留守居役の日記』で第 40 回日本エッセイストクラブ賞受賞。『忠臣蔵の決算書』『赤穂事件と四十六士』『武士道の名著』など著書多数。NHK・Eテレ『知恵泉』、『ラジオ深夜便』などテレビやラジオに数多く出演。

武士道は、戦国時代以来の戦闘者としての倫理と、江戸時代になって要請された為政者としての倫理があった。しかし、為政者として行動することになっても、なお戦闘者としての倫理は、武士道の根幹として重視され、自らの行動の指針ともなった。彰義隊の戦いは、まさにその戦闘者としての倫理が前面に出たものだった。

4. 長唄・岡安社中

彰義隊士だった関弥太郎が明治に岡安喜平次を襲名し長唄岡安派として活躍し名声を博した。その同門である七代目岡安喜代八が、彰義隊が自らを楠正成軍に擬（なぞら）えた故知をふまえ（新政府軍は足利尊氏）、彰義隊にふさわしい「楠公（なんこう）」を唄いあげる。明治 35 年に榎本虎彦が太平記から採り作詞した物語風長唄の傑作で、前半は楠正成父子の「桜井の駅の別れ」、後半は「湊川（みなとがわ）の合戦」で盛り上げる。



七世 おかやすきよはち
岡安喜代八

昭和 9 年（1934）東京生まれ。宗家十四世・杵屋六左衛門（人間国宝）に師事。昭和 49 年、皇居内にて御前演奏の栄誉を受く。平成 5 年、「豊島区邦楽連盟」理事長就任。平成 29 年、重要無形文化財長唄保持者（人間国宝）認定。岡安流分家の当主として、本家に協力、「岡安会」を主宰。研鑽を重ねるかたわら後進の育成に向けて、小学校、高等学校で長唄・三味線を中心とした伝統邦楽を指導し邦楽の普及に勤め現在に至る。

他に、唄は杵屋勝彦他、三味線は八世岡安喜三郎他、囃子方は望月左武郎社中



八世 おかやすきさぶろう
岡安喜三郎



もちづきさぶろう
望月左武郎

5. 後援（順不同）

台東区、文京区、荒川区、港区、会津若松市、東京新聞、福島民報社、福島民友新聞社、上野観光連盟、日蓮宗・龍泉寺、臨済宗・全生庵、曹洞宗・東善寺、徳川記念財団、柳営会、万延元年遣米使節子孫の会、咸臨丸子孫の会、開陽丸子孫の会、NPO 法人東京シティガイドクラブ、長唄岡安会、川柳公論社（十六代 櫻木庵 尾藤川柳）、台東川柳人連盟（理事長内田博柳）、山岡鉄舟研究会、高橋泥舟史料研究会、赤松小三郎研究会、ひげの梶さん歴史文学探歩会、西郷南洲顕彰館、探墓巡礼顕彰会、幕末史を見直す会、小栗上野介顕彰会、幕末史研究三十一人会

6. 協力

大阪城天守閣

7. 主催



おおくら はちろう
大藏八郎

ohkurajpn@gmail.com

彰義隊子孫の会事務局

市川総合研究所

昭和 24 年（1949）生まれ。東京出身。東京大学法学部卒。縦の会OB、東洋エンジニアリング（株）、（株）エフテック・カナダ法人、米国法人、北米統括会社、本社法務顧問を経て現在市川総合研究所代表理事・法務コンサルタント。

柳営会、万延元年遣米使節子孫の会監事、彰義隊子孫の会事務局

モデレーター／企画コーディネーター／総合プロデュース

たまたようち おがわじろう かとうけんたろう しもやまひでゆき
玉手洋一、小川二郎、加藤健太郎、下山英之、

まさいよしはる たかはしいさお
正井良治、高橋 功

以上